

苦難を克服して

被災高校受験生の記録

1. 病氣と集中豪雨

飯田風越高校一年

S・K

(63)

私も今は風越高校の一年生。でも昨年の今頃は右足の動かない病気で寝ていました。学校には行けず、この大切な時期に一月も休み続けていた私は、おもしろくない病氣や勉強の事などで、毎日毎日をゆううつに過ごしていました。ぼつぼつ回復に向った病氣も、集中豪雨のためにもた逆もどり。それにこの豪雨は、私の村や家に大きなきずあとを残していった。百姓の命である稲を、一瞬の間に茶色の膚に変えまして。私の家は田んぼが一段近くやられた。病氣のために使った数万の金、その金を米のきょうしやつ金からまわそうと

考えていたのに、それどころではなくなつた。父は団体職員、母が主に経営してゐる兼業農家とでも言う私の家は、どの時は、ガマぐちから千円札が数日のうちに、何枚もつかわれたから、いろいろの面が母と父の対立も多し日々でし

た。
父の実家とクラスメートの家は、天竜川の中に入り、流れはしなかつたが、他の所へ家を建てるなければならなくなつた。今だに忘れられない、有線の早急の連絡。

「今度は○○が危ない」とふるえ聞く聞いたあの時。

道という道は山崩れや崖崩れで人が通るのにやっどのありさま。どんな様子だからバスなど通らない。病気はまた悪くなる。勉強は二月ほりつぱなし。どの時の私の気持は、悲しみと絶望でいっぱいでした。

そんな日から半月後に夏休みが来た。私はどの時クラスメートの優しい友情に心を打たれました。先生と皆で話し合い、私の休んでいた二カ月の勉強を、数人の男女が四日間、入試の準備や、災害の復旧に忙しいのにもかかわらず、学校から一時間近くもある山道を登り、教えるに來まくれました。病気がかりの私にとり、えらい事だった。それに私も中学三年生。男子の時など気づかぬ、次の日はまた熱が又一日寝たこともありました。

夏休み後はバスで学校にかよいました。そして半年の間は走ったり飛びはねる事は禁止されました。私は、体の健康な人とちがい、妙な一年だったようです。

一、二年の時の私の成績に比べたら低下はしてしまいますけれど、入試が近くなつた一月頃からの、総合テストの結果、自分の希望した学校に受験できるようになった事は、私一人のカズはないと思つた。あの時、四日なりでも皆が、一生懸命教えてくれたからだ。あの日に皆が、

「災害のかたづけだ。一人の病気のためになんだ。」

「なんまきって、来なくねなかつたら、きつと私も、」

「あぶないから、良く家の人と相談しろ。」

「って言われたかもしれない。」

そして、自分の希望の高校へ入学できなかった悲しい人々の中に、私もいたかもしれない。どう思うと、クラスメイトとは本当に優しく、ありがたいものなのかと、つくづく感謝した。

中学卒業後、全国からよせられたやさしい手紙の書きまとも、手紙の交換はとだえた。そして中学卒業とともにクラスメイトとも別れ、私たちはそれぞれ道を歩んでいる。進学者の人々とプラットホームで時々あうが、どちらともなく、だれでもが、顔をぞらす。そんな私でも、中学の友は、皆優しかったなあ。一人で心の中でつぶやいている。

バスの窓から、天竜川を見おろすたびに、豪雨の時、数十戸という家をのんだあのおそろしい天竜川を思い出す。そして二度とあんな日がないようにといつも思う。今日もまた災害復旧工事に働く人々がバスにのつた。

(豊丘村豊丘中学校卒業 三十七年)